

カール・ラートゲンの少年期と青年期 (上)

—— 歴史のなかの自我形成と思想形成 ——

野 崎 敏 郎

〔抄 録〕

ヴァイマル生まれのカール・ラートゲンは、父母他の人々から大きな感化を受け、また幼少期の病気を契機として、ラートゲン家の出自シュレースヴィヒ＝ホルシュタインの政治風土に触れ、独特の自我形成過程を辿る。快活で社交的な子供だった彼は、兄の入隊と父からのプレッシャーに誘発されて発病し、ギムナージウムを二度にわたって退学することを余儀なくされる。最初の退学ののちには、自由主義の気風をもつシャフナー学院に転校し、二度目の退学ののちには、父の郷里近くで保養生活を送りながら、家庭教師に就いて学習を積む。

キーワード: ラートゲン, シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン, ヴァイマル, ジークフリート・シャフナー

I は じ め に

カール・ラートゲン (1856-1921) は、十九世紀後半から二十世紀前半にかけて、独日双方にわたって重要な足跡を印した社会経済学者であるが、日本で (日本語文献において) 知られているラートゲン像と、ドイツで (ドイツ語文献において) 知られているそれとはいちじるしく乖離している。なぜそうした乖離が生じているのかももちろん重要な問題だが、それを論ずる以前に、そもそもラートゲンの人生行路が、独日双方においてまったく知られていない——じつに彼の直系子孫においてもまた知られていない——ので、本稿では、ラートゲン研究のための基礎資料づくりをなし、またわれわれ研究者が踏まえるべき基本的な論点を提示することに集中したい。

ほぼ編年順に追っていくが、彼の少年期・青年期における歩みを考証するさい、重要な事項がいくつかある。第一に、彼は、彼を取りまく人々の活動と思想からつねに多大な影響を受けている。したがって、両親・姉妹たちをはじめとする人脈をみなくてはならない。第二に、彼の自我形成においては、マージナルな存在としての自意識が色濃く投影している。彼は、シュ

レースヴィヒ＝ホルシュタインに連なる者としても、闘病生活者としても、名士群のなかで庇護されている虚弱な子供としても、マージナルな存在であるという自覚をもつことを余儀なくされている。その自覚は、やがて独特の自由主義とナショナリズムとを醸成し、ギムナージウム時代における歴史への目覚めに結びつき、また大学時代における社会科学への道として彼の行路を規定する。さらに日本への渡航・赴任という特異な跳躍的決断は、彼の置かれていた歴史的布置連関と個人的運命との結節点そのものを記している。こうした二つの点に留意しながら、この数奇な運命を辿った魅力的な人物の歩みをひとつひとつ確認していこう。

II 父母姉兄と支援者たち

ラートゲン周辺の人脈についてはすでに考究しているが（野崎敏郎 2004：204-215，同 2005：39-49），本稿中では、多くの無名の人士が重要な役を担う人物として登場するので、この旧稿に依拠して、本稿を理解するために必要な人脈をまず略述しておく。なお、旧稿に掲載した家系図にはいくつか訂正が必要だが（野崎敏郎 2004：206-207，同 2005：40-41），別稿にあらためて掲載する予定であり、ここでは省略する。

ラートゲンの母コルネリア（1822-78）は、歴史学者バルトルト・ゲオルク・ニーブールの長女である。ニーブールは、プロイセン改革を企てたカール・フライヘル・フォン・シュタインの財政ブレーンでもあった。長女のコルネリアが9歳のときに両親があいついで急逝したため、その後彼女はキール在住の親戚ドーレ・ヘンスラーに引きとられて育った。このとき彼女の後見人となったのは、法学者フリードリヒ・カール・フォン・サヴィニー、法学者アウグスト・フォン・ベートマン＝ホルヴェーク、神学者アウグスト・トヴェステンであった。養母ヘンスラーは、哲学・宗教・文芸方面に優れた才能を有しており、義理の甥に当たるトヴェステンとのあいだに学問的交友を保っていた。コルネリアはこの養母の厳しいしつけのもとで育った。そしてニーブールの遺稿を整理していたオリエント学者ユストゥス・オルスハウゼンの紹介で、法律家・行政官ベルンハルト・ラートゲン（1802-80）と結婚する。シュレースヴィヒの職人の息子である彼は、オルスハウゼン兄弟の学生時代からの友人である。

ベルンハルトは、オルスハウゼン兄弟とともに1848年のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン蜂起に身を投じ、デンマークによる支配からの離脱を企て、臨時政権の法務大臣を務め、その激務に妻コルネリアも献身的に協力する。しかしデンマークとの駆け引きによって、プロイセン軍がシュレースヴィヒ＝ホルシュタインから撤退し、蜂起は失敗に終わる。郷里を追われたベルンハルトは、ゲッティンゲンを経てベルリンの法律職に就くが、自由主義的な彼は、保守派との裁判抗争に巻きこまれて苦境に立たされ、結局ヴァイマルへと転出する。この苦難に満ちた一家を物心両面から支えたのは、ベルリン在住のアウグスト・トヴェステンとその妻ティーネであり、またティーネの母ヘレーネ・ベーレンスであった。

ラートゲン夫妻の娘たちのうち、長女イーナ（ゲオルギーネ）は、オルスハウゼンの息子ローベルト（産婦人科医）と結婚し、次女トーニ（アントーニエ）は画家フリードリヒ・プレラー Jr. と結婚し、三女ルーツィエは、ローベルト・オルスハウゼンの紹介で、ハッレ大学におけるローベルトの同僚である経済学者グスタフ・シュモラーと結婚する。一方、父と同名の長男ベルンハルトは、成長とともに進路に悩み、両親の意に反して軍人への道を歩むようになる。こうした人々が、カール・ラートゲンを取りまいている。

Ⅲ 出生と洗礼

祝福と絆

カール・フリードリヒ・テオドール・ラートゲンは、1856年12月19日午前0時半頃にヴァイマルで生まれた。誕生から4日後に、父ベルンハルトはティーネ・トヴェステンに宛てて次男の誕生を報告している。カール・ラートゲンにかんする最初の記録である⁽¹⁾。

うっかりしておりまして、まあ誰かに責任があると言うつもりはないのですが、金曜日〔19日〕に認めました二通の手紙を投函しわすれ、いましがたそれを見つけました。そのうちの一通は、つい先日の朝コルネリアが無事出産して元気な男の子を得たことをお伝えしたく、親愛なる上級教会評議官夫人である伯母様に宛てさせていただいたものです。いまこの一筆を差しあげるのを取りやめ、そのかわりに次のように申しのべます。コルネリアとおちびちゃんは、ありがたいことに、その後健やかに過ごしておりますので、医者をあらゆる点で満足させることがなんとか可能な状態です。最後のひととき、私が決定的な瞬間を待ちのぞんでいたとき、コルネリアの疲弊と衰弱が大きく緊張から解放されたように見受けられました。またそれだけにいまは、慈悲深く彼女を守ってくださった神にいっそう深く感謝しており、私どもの喜びもひとしおです。

子供たち⁽²⁾は弟をみて歓声を上げましたが、クリスマスプレゼントが元日の夜にまで執行猶予されたことを知ってすぐに悲嘆に暮れています。そこで私どもが望んでいるのは、しばらくしてから、子供たちの喜びの輪のなかに母親も加えることを考えてもいいだろうということです。

コルネリアから伯母様ご一家へ心からの挨拶をお送りし、そして年配の伯母様方にご清祥をご祈念申し上げます。私も心よりそれに唱和いたします。4年前にそちらで過ごした楽しい祝祭の夜のことをいまもほんとうによく思い出します。あのとき伯母様方のご好意に子供たちはとても喜びましたし、私どものベルリン在住時にひとかたならず差しのべられましたご高配とご厚情の数々をも思い出します。

ご主人様にも切によるしくお伝え願います。ご主人様についてはよいご様子であることの

みをたびたび耳にしております。また私どもを今後ともご厚情ある思い出にとどめられますようにお願い申しあげまして、ご挨拶とさせていただきます。

母コルネリアはこのとき34歳で、すでに4人の子を産んでいるとはいえ、疲労は大きかったようだ。産後の状態は申し分ないと言えるほどではなかったが、不安定ながらも良好だったことが窺える。

父ベルンハルトは、喜びに浮かれているときにありがちな手抜かりのため、その日に書いたものを投函しわすれているが、出産当日にさっそくティーネ・トヴェステンに宛てて書簡を書いていることは、トヴェステン夫妻とラートゲン家との関係をよく表している。とくに後段でしめされているように、「4年前」あるいは「ベルリン在住時」に夫妻から大きな支援を受けており、それがラートゲン一家にとって困難な時期だっただけに、ベルンハルトにとってもコルネリアにとっても、夫妻の存在はいっそう深く心に刻まれた。そしてヴァイマルという新天地で新しい生活を切りひらいているときに授かった子は、この家族にとって希望の象徴であった。ティーネもこの子の誕生を喜び、それを実母ヘレーネ・ベーレンスに伝えている。

一方コルネリアも、出産直後にもかかわらずすぐ書簡を書き、次男の誕生をドーレ・ヘンズラーに伝えている。またドーレも、コルネリアからの報せを受けるとすぐに返事を書き、「かわいい小さな新生児」「かわいい大切な子供」を祝福している⁽³⁾。長年にわたって大きな苦難を背負いながらコルネリアを育て、コルネリアの結婚後も連絡を絶やさなかったドーレにとってもまた、この子の誕生は新しい希望をもたらすものだった⁽⁴⁾。

男の子は「カール」⁽⁵⁾と名づけられた。これは、かつてバルトルト・ゲオルク・ニーブールの子（コルネリアの弟にあたる）が生まれたとき、その洗礼代父カール・フライヘル・フォム・シュタインからとってつけられた名だが、この子は夭折しており、そのためベルンハルトとコルネリアの次男にこの名があらためて与えられることになったのである（野崎敏郎 2005: 12）。したがって、カール・ラートゲンの名は、間接的ながら、十九世紀プロイセン改革の旗手シュタインに由来していることになる。

ヘレーネ・ベーレンスの執念とシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン人の刻印

洗礼は翌1857年2月20日夕刻で、そこには家族以外に6人の立会人がいた。そのなかには、カールの伯父で、かつてシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン蜂起に加わっていたカール・フランケ（コーブルクの行政官）と、カールの祖父ニーブールの先妻の義妹にあたるヘレーネ・ベーレンス（キール在住、ティーネ・トヴェステンの実母）がいる⁽⁶⁾。この事実もまた、蜂起に加わった人たちや、ニーブール家に連なっている人たちのあいだの絆の深さをしめしている。

なかでもヘレーネ・ベーレンスが列席していることが目を惹く。彼女は当時じつに95歳である。1831年にニーブール夫妻があいついで亡くなったとき、夫妻は、ヘレーネの夫ジーク

フリート（その当時すでに死亡していた）が残した負債を保証人として負っていたため、夫妻の遺児たち（当時9歳のコルネリアを含む）は経済的な苦境に立たされることになった。ヘレーネ夫人自身も当然多額の負債を抱えていたはずだが、それ以後四半世紀にわたって遺児たちの成長を見守ってきた夫人は、娘のティーネからカール誕生の報せを受けると、コルネリアのために自分ができる最後の務めはこれだと思ったり、コルネリアの次男の洗礼になんとしても立ちあうことを決意し、周囲の反対を押しきり、老骨に鞭打って遠路キールから駆けつけたのである。彼女の年齢からみて独り旅は考えられず、娘のティーネあるいは他の誰かが旅行に付きそい、介助したのであるが、それにしても、このもっとも寒い季節のキールでは、高齢者が家の外に出ることがすでに命を危険にさらすことを意味するのに、そればかりかこれほどの大旅行を敢行したのは驚異である。長旅に耐えられるよう体調を整え、厳寒のキールを出発し、いくつもの列車を乗りつき⁽⁷⁾、機関車の吐く煤煙を浴び、何日ものあいだ鉄道初期の粗末な客車に揺られつづけながら一路南へと向かう九十歳代の老女の姿を想像するとじつに鬼気迫るものがある。彼女が到着するのを待っていたため洗礼日がやや遅くなったのであろう。命を賭してこの大仕事をやりおおせた彼女は一年後に亡くなっている⁽⁸⁾。

ティーネ・トヴェステン、ドーレ・ヘンスラー、ヘレーネ・ベーレンスは、長年にわたってシュレースヴィヒ＝ホルシュタインの苛酷な試練と苦難とを潜りぬけてきた。彼女たちにとって、ラートゲン家の次男は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタインの未来を担うべき希望の星である。このトヴェステン家・ヘンスラー家・ベーレンス家の——またニーブール家・オルスハウゼン家の——大きな期待を、カール・ラートゲンは生まれながらにして担わ^せら^れてい^る。彼は、こうした刻印から逃れられないのである。

IV 家族関係と快活な幼年期

ラートゲン家の人脈

カールが生まれたラートゲン家は、機知に富んだ母コルネリアを中心とした親密な一家であった（Jordan 1904: 113）。父と母は、1848年のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン蜂起の渦中であって励ましあいながら激務を担い、蜂起挫折のためキールを追われ、ベルリンでも生活は苦しく、心休まることはなく、ようやく1853年にヴァイマルに根を下ろすことができた。その3年後に生まれたカールは、一家が落ち着きを取りもどすことができた幸福なヴァイマル時代の象徴である。

こうした経緯から考えると、彼の生まれそだった環境を、たんにドイツ中産層・官僚層の家庭とのみ抽象的に規定するのは適切でない。そこには他の中流家庭にはない独特の紐帯が存在していた。シュレースヴィヒ＝ホルシュタインの歴史と文化を背負い、それを愛したこの一家は、現実政治の荒波に翻弄され、郷里を追われ、そのなかでいっそう互いの絆を固くしていっ

た。こうして激しい嵐にも耐えられるよう堅固に組みあげられたこの巢のなかにカールは生まれたのである。

幼少期のカールは、父母に連れられて各地を旅行している。父ベルンハルトは、たびたびカールスバート他へ湯治に出かけており、カールがそれに同行することもあった。これは、カール自身にも療養の必要があったからである（後述）。父ベルンハルトが湯治場で会っていた人物のなかには、政治家・官僚のほか、経済学者ハンセン、ロッシャー、法学者リッベントロップ、ホルツェンドルフ、ローレンツ・フォン・シュタインらが含まれている（Olshausen ca. 1943: 106-107）。あとで触れる画家フリードリヒ・プレラーの父親（息子と同名）も、たびたびカールスバートを訪れている（Jordan 1904: 128）。この地には、体のあちこちに問題を抱える政治家・官僚・芸術家・学者たちが集う一種のカールスバート・クライスが存在していたのである。そして湯治場において、少年カールもこうした人々のうちの幾人かに出会ったことは確実である。

兄ベルンハルトの入隊問題

1865年に、ラートゲン家にとって—またカール自身にとっても—重大な事件が起きている。それは、カールの9歳年上の兄ベルンハルトのプロイセン陸軍入隊である。ベルンハルト・アウグスト・ニーブール・ラートゲンは、父の名ベルンハルトを継ぎ、ラートゲン家最大のパトロンであるアウグスト・トヴェステンと祖父ニーブールの名をも冠せられたことから推察されるように、ラートゲン家待望の長男として大きな期待を寄せられていた。ところが、彼はこの年に自発的に入隊するにいたる（Rathgen, B. 1928/87: VII）。1857年にヴァイマルのギムナージウムに入学した彼は、その後アルンシュタットのギムナージウムに転じ、この1865年当時は第Ⅱ学年に在学しているから⁽⁹⁾、あとわずかまで課程を修了して大学入学資格を取得できたはずであり、父は当然反対したことであろう。父ベルンハルトは、のちのカールにたいする態度から類推して、みずからの経験を踏まえ、息子（たち）には法律や行政の方面にすすんでほしいと強く望んでいたと思われる。プロイセンの武張った空気を嫌っていた母コルネリアも、長男の入隊に積極的に賛成したとは考えられない⁽¹⁰⁾。

しかし長男ベルンハルトはギムナージウムを中退し、軍の機関で学びながら技術者として身を立てる道を選ぶ。アルンシュタットのギムナージウムが作成したと思われる修学状況メモによると、中退の理由は、軍機関において修養を積むためとされており、成績にかんしては数学が抜群だとされている⁽¹¹⁾。彼は後年になると兵器史の研究に没頭するようになるが、入隊当時の希望としては、得意の数学的知識を活かし、それを伸ばしながら軍事技術の専門家になろうと考えていたようである。まず砲兵隊に身を置いた彼は、普墺戦争・普仏戦争に従軍し、以後軍人としての人生を歩んでいく。したがってこれ以降、父の意向と期待は、ギムナージウム入学を目前に控えた次男カールの行く末に向けられる。そしてそのプレッシャーに由来するス

トレスが、後述するカールの健康問題に絡んでくるのである。

父母の気質の違い —— 姉トーニの結婚問題 ——

ラートゲンとその姉妹たちにとって、父からの影響は大きなものであるが、父ベルンハルトと母コルネリアは、その蜂起時代の緊密で献身的な協力協働にもかかわらず、また生涯にわたる円満な夫婦生活にもかかわらず、顕著な気質の違いをみせている。父が、控えめかつ生真面目であり、「軛に繋がれない不屈の民」⁽¹²⁾の真正の息子であり、苛酷な経験によって強固になった誠実な人物であったのにたいして、母は、デンマーク人の類型を超えた類まれな女性であり、神経がこまやかで機知に富み、しかも活力に満ちていた⁽¹³⁾ (Jordan 1904: 112-113)。

夫婦間に伏在していたものの考えかたの違いが顕在化したのが、次女トーニと画家フリードリヒ・プレラーとの結婚問題である。この青年画家は、父親の知り合いの娘トーニ（当時19歳）をモデルにデッサンを描きすすめているう

ち、画材の虜になってしまったのである。当時まだ25歳になっていなかったプレラーは、その心情を内に秘めるばかりだったのだが、そこに希望の光を灯したのはコルネリアだった (Jordan 1904: 113)。彼女は、夫には内緒でプレラーのアトリエを訪ね、娘との仲を取りもつことを確約したのである (ebd.: 133)。

しかしやはり難関は父ベルンハルトの説得であった。彼は二人の婚約を認めようとしなかったのである (ebd.: 134)。父親の目からみると、まず二人ともあまりにも若すぎる。またこの青年は、ヴァイマルの有力者でもある知人の息子だとはいえ、駆け出しの貧しい画家にすぎず、将来の生活も不安定だと予想される (Olshausen ca. 1943: 98)。さらに、これまで、ラートゲン家・ニーブール家の娘たちの多くは聖職者・医師・学者・行政官に嫁いでおり、父親としては、トーニもそうした方面の人士に嫁がせるつもりだったのであろう。こうした点から、彼はこの結婚に強い難色をしめしている。コルネリアとトーニは粘り強く彼を説得し、やっとのことでトーニとプレラーとの文通を許可させることに成功する (Jordan 1904: 135)。そして1865年には婚約を公表し、ついに1867年9月に結婚に漕ぎつける。もしもコルネリアのなかだちがなかったら、これは破談にいたっていた —— あるいはそもそも結婚の申し込みにまで



図IV-1 姉トーニ・ラートゲン
画家プレラーがトーニを見初めたまさにそのときに描いていた1864年のデッサンである (Jordan 1904: 109)。

漕ぎつけるにいたらなかった——可能性が高い。若い二人のkolneriaへの感謝は深いものであった。

この事例にあざやかにしめされているように、kolneriaは、子供の希望を実現するために心を砕き、夫よりも子供の意向を優先させ、必要なら夫に隠れてある種の工作をすることを厭わなかった。こうした態度は、前記の長男ベルンハルトの入隊問題にさいしても貫かれたと思われる。この夫婦にあっては子育てや教育の方針が大きく食いちがっている。したがってまた、後述する次男カールの進路問題にかんしても——残念ながらこのときの彼女の態度をしめす資料はみあたらないが——彼女は夫とはちがう方針で臨んだと考えるべきである。

1866年のスイス旅行

ギムナージウム入学前のカールの様子を直接伝えるのは、1866年4～5月のスイス旅行記である。旅行からさほど時が経っていない頃にかかれたと思われるこの記録は、9歳の彼が自分自身を綴ったものとして貴重である。ラートゲン一家は、ベルン、モルジェ周辺の湖畔・山岳地帯を巡り、少年カールもその雄大な環境を満喫し、ときには単独行動も敢行している。その記述の一部を拾ってみよう⁽¹⁴⁾。

〔4月〕23日午後、ぼくはビンツァー家にいた。夕方ガイザン家の人々といっしょに散歩した。そのつぎの日〔24日〕は、ビンツァー家の人々といっしょにいた最後の日だった。そのまたつぎの日〔25日〕にここを出発した。その日の夕方、ぼくたちはガイザン家にいた。つぎの朝〔26日〕、ぼくはひどいカゼを引き、ママはインフルエンザではないかと心配したので、ぼくたちはベー⁽¹⁵⁾へ行った。ヴヴェ⁽¹⁶⁾へ行く途中でみた景色はすごかった。ヴヴェはすてきなところだった。ぼくたちは植物展をみにいき、それからFavoriteという名前の船に乗った。その夜ベーに着いた。ぼくはすごく寝た。つぎの日〔27日〕にぼくはサン・モーリス⁽¹⁷⁾へ行き、喜劇をみた。とてもよかった。帰り道で、ものすごく雨がふった。27日⁽¹⁸⁾にぼくは塩水浴につかった。30日、ぼくは散歩に行き、いろいろな景色をみた。湖〔レマン湖〕もみて、帰りに道にまよったと思ったが、ぶじ家についた。31日、ぼくは遺跡へ行き、そこですごい景色をみて、また湖をみた。家にもどったとき、ルーツィエがモルジェ⁽¹⁹⁾からやってきた。

旅行記全体から判明するのは、旅行中、雨の日以外はじっとしていることがなく、風邪をもものともせず精力的に動きまわり、ときにはかなりの距離を踏破し、大人・子供を問わず多くの人と会う少年の活発な姿である。後述する彼の病歴との対比で、ギムナージウムに入学する直前期の彼が快活で活動的・社交的な子供であったことを確認しておくことは重要である。

後年、大学生になった彼は、学期が終わると各地を旅行し、ときには長距離を踏破する山歩

きを敢行する。その後アジア回りで日本へ渡航し、アメリカ回りで帰国するから、このとき世界一周を果たす。滞日中も、中国・朝鮮を回ったほか、日本国内各地を周遊あるいは視察し、夏は軽井沢等において保養に努めている。帰国後、新婚旅行をチュニジアなど北アフリカで過ごし⁽²⁰⁾、その後もスイス他の山岳地帯や景勝地を訪れている。こうした彼の旅に親しむ人生は、すでに幼少期に始まっている。旅行は、もちろん楽しみのため、また見聞を広めるためでもあるが、一面では、体の弱かった彼にとって、自覚的に体を鍛え、新鮮な空気を吸って健康を保つための活動でもあり、ときには直接療養を目的としていることもあった。

V 発症と苦難のギムナージウム前半期

特異な在籍状況

カールは、1867年春に、自宅から歩いてすぐのところにあったヴィルヘルム・エルンスト・ギムナージウム⁽²¹⁾ (以下 WEG と略す) に入学する。著名な進学校であり、彼の入学前の時期には教師の待遇改善がなされ、優秀なスタッフが集められていた。彼が在学していた当時の校長ヘルマン・ラッソウはラートゲン一家と親しく (Olshausen ca. 1943: 104)、またラッソウの指導のもとで改革やカリキュラム改善がすすめられていた。たとえば1868年には各学年の算数の時間数が増やされている (Francke 1916: 336-337)。これは経済学や自然科学の勃興に対応するためであろう。

ラートゲンの修学歴はきわめて異例である。1867年春に入学し、1876年春に大学入学資格を取得してシュトラースブルク大学に進学したことははっきりしているが、そのあいだに転出・転入を繰り返しているのである。WEG に遺されている彼にかんする複数の記録を突きあわせてみると、一見辻褄が合わないように見え、そのため、「旧在籍生徒ファイル」⁽²²⁾ を作成した記録整理者は、扱いに窮したあげく、彼の在籍期間を「1867-68年」および「1872-76年」とみなしているが、これは明らかに誤っている。

WEG の学籍登録簿 (Matrikel) と『学事年報』 (Jahresbericht) と通信簿⁽²³⁾ (Censurbücher) の記載状況を表V-1に示す。この表を、当時の家族・友人の書簡や大学入学資格試験関連文書 (Abiturientenprüfungen) 他の史料・文献と突きあわせて、彼の遍歴を整理してみよう。

カールは、1867年の学籍登録者の29番目に記載されており、他の新入生 (第VI学年登録生) たちとともに1867年春に入学したことを確認できる。ところが、『学事年報』1867-68年版に彼の名は記載されていない。この『年報』は、各年次末 (復活祭) に、一年間の学事を整理してまとめておくものだから、年次末において在籍していない生徒はここに記載されない。つまり彼は、年次末の1868年復活祭の時点でWEG に在籍していないのである。つぎに、この年次の通信簿は、1867年秋のものも1868年春のものも存在しない。このことから、彼は

表V-1 ラートゲンのWEG修学履歴

年次	学年	学籍登録簿の記載	『学事年報』の記載	通信簿	欠席時間数
1867/68	第VI学年 (Sexta)	あり (登録順 29 番)	なし (学年生徒数 26 名)	なし	不明
1868/69	第V学年 (Quinta)	なし	なし (学年生徒数 31 名)	なし	—
1869/70	第IV学年 (Quarta)	あり (登録順 20 番)	あり (39 名中席次 34 番)	1869 秋あり, 1870 春あり	SS: 36, WS: 124
1870/71	第III b 学年 (Untertertia)	なし	なし (学年生徒数 47 名)	1870 秋あり, 1871 春なし	SS: 225 (223?)
1871/72	第III a 学年 (Obertertia)	なし	なし (学年生徒数 38 名)	なし	—
1872/73	第II b 学年 (Untersecunda)	あり (登録順 57 番)	あり (28 名中席次 25 番)	1872 秋あり, 1873 春あり	SS: 0, WS: 19
1873/74	第II a 学年 (Obersecunda)	なし	あり (24 名中席次 14 番)	1873 秋あり, 1874 春あり	SS: 6, WS: 24
1874/75	第I b 学年 (Unterprima)	なし	あり (14 名中席次 8 番)	1874 秋あり, 1875 春あり	SS: 41, WS: 73
1875/76	第I a 学年 (Oberprima)	なし	あり (12 名中席次 5 番)	1875 秋あり	SS: 93, WS 不明

注: SS=夏学期, WS=冬学期。通信簿は、次学期への申し送りの意味をもつものなので、次学期が存在しない1876年春（最終学期である1875/76年冬学期分）の通信簿は、欠落しているのではなく、もともと作成されなかった。

出典: Höhere Schulen in Weimar. Wilhelm-Ernst Gymnasium 58. Matrikel (Verzeichniß, Album) der seit dem Jubiläum 1816 in das Wilhelm-Ernstinische Großherzogliche Gymnasium zu Weimar Eingeführten (各年次). Jahresbericht über das Wilhelm-Ernstische Gymnasium zu Weimar (各年次). Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar. Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu [Weimar]. K. Rathgen. Privataarchiv B. C. Witte.

1867年9月までに退学したことが明らかである⁽²⁴⁾。

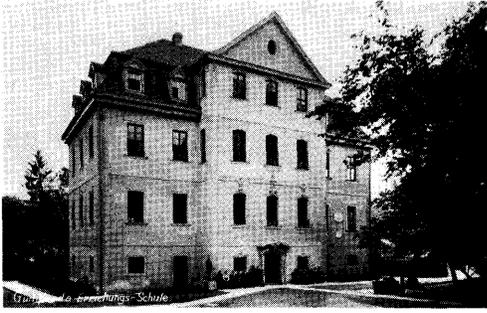
この中退とおそらく関係があるのが、1867年12月初旬に、コルネリアがカルブスリート⁽²⁵⁾にカールを連れていったという事実である。親戚のエミーリエ・フォン・ヴォルツォーゲンを見舞ったコルネリアは、カールとともに、この地に四週間も滞在している (Olshausen ca. 1943: 77)。クリスマス休暇が近いのに、それを待たずに子供を長期欠席させる積極的な理由があったとは考えにくいので、このときまでに両親はすでにカールをWEGから中退させたと考えるのが自然である。この小旅行は、親戚の見舞いとカールの保養とを兼ねていたのであろう。

ヴァイマルのギムナージウムに入学したものの半年ほどで脱落したのは、はじめて知りあった学友や教師たちとうまくやっていこうとこころみるときに避けられない第一学年特有のストレスに彼の繊細さが耐えられず、くわえて虚弱な体質が、ギムナージウムという未知の環境に適応できなかったからであろう。また既述のように、2年前に兄が入隊したことによって、次男カールにたいする父の期待が急に大きくなり、そのプレッシャーを受けていたことが伏線として考えられる。

シャフナー学院への転校とWEGへの復帰

WEGを退学したカールは、イエーナ近郊のグンペルダに設立されたばかりのシャフナー学院 (Lehr- und Erziehungsanstalt für Knaben) に転じている⁽²⁶⁾。これは、教育家ジークフリート・シャフナー (1826-77) が、1867年10月3日に設立した全寮制の学校である。創立の理念は、知育偏重に異を唱え、多彩な科目を配した体験重視の全人教育である⁽²⁷⁾ (Bergner 1917: 30)。

設立当初の生徒数はわずか5名であった。この5名の氏名は判明しており、このなかにカー



図V-2 シャフナー学院本校舎

旧領主邸を再利用した本校舎。ラートゲンら生徒はこの屋根裏部屋に寄宿していた(筆者所蔵絵葉書)。

田舎に設立されているので、その清浄な空気はカールにとって望ましいと判断されたと思われる。さらにこの学院は、生徒を引率して各地へ旅行することを重視しており、これは、旅行好きなカールに大きな喜びをもたらしたことであろう。

シャフナー学院は、創立当初、ギムナジウム等へ進学するための予備教育機関という位置づけを有しており⁽²⁸⁾ (Kahl 2007: 26)、したがってギムナジウムから転校してきたカールはきわめて異例の存在だった。しかし考えてみると、病疾の発症によってギムナジウムからの脱落を余儀なくされた彼にとって、受け皿となってくれる学校が、まさにそのときヴァイマルからさほど遠くない地に創立され、しかもそこは空気清浄な鄙辺であって保養にも好適だというのは、じつに稀有な僥倖と言わなくてはならない。このときのみならず、青年期・学生時代・滞日時を通じて、いくたびもさまざまな僥倖に恵まれており(それはべつにあらためて論ずることになるだろう)、彼は稀代の幸運児である。

創立当初の教員は、シャフナーを含めて3名であり、シャフナー自身が担当した科目は、ドイツ語、フランス語、ラテン語、数学、自然史である(Kleemann 1938: 11)。またシャフナーの妻エリーゼ⁽²⁹⁾と娘も授業を担当している(Schaffner 1876: 1)。

この当時の授業の様子を視学官が報告している(1868年1月25日付)。それによると、11～12歳の生徒たち14名はV・IV・IIIの三学年に分けられ、第IV学年(3名)ではシャフナーがラテン語を教え、その行きとどいた説明が視学官の印象に残っている。第III学年(最上級、3名)では、シャフナーの15歳の娘がフランス語を教えているが、落ち着き、わかりやすさ、正確性といった点で傑出しており、視学官を瞠目させている。第V学年では8名がラテン語の初歩をしっかりと学んでいる最中である⁽³⁰⁾。

ここで描写されている教室のなかにカールがいるかどうかは確認できないが、彼が転入してきた当時の学院の様子はまさにこうしたものであり、シャフナーの教育理念と新機軸の教育方針とのもと、新しい学校づくりに懸命に取り組んでいるシャフナーとその家族と教員たちの意欲がいきいきと伝わってくる。カールは、この環境のなかに1867年末～1868年春頃に転入し、

ルは含まれていない(Kleemann 1938: 11)。生徒数はその後14名に増え、翌1868年春には30名を数えている(Schaffner 1876: 1)。カールはこの14名か30名のうちに入っている。設立されたばかりであることもあり、きわめて小規模であり、WEGにくらべるとアット・ホームな雰囲気であったと推察され、したがってカールの繊細な神経にたいする好影響が期待されたのであろう。またこの学院は片

表V-2 WEGの1876年3月修了生一覧

姓/名	生没年	学籍登録年	修了直後の進学先等	後年の職業等
Fischer, Paul	1853-1877	1872	—	修了翌年に死亡
Heinemann, Werner v.	1856-1921	1874	陸軍入隊	陸軍少将
Jörs, Paul	1856-1925	1872	ボン大学哲学部	ウィーン大学教授（法制史）
Kastner, Rudolf	1856-1944	1869	イエーナ大学法学部	ブランケンハインの法律顧問官
Kemlein, Georg	1855-1924	1869	イエーナ大学哲学部	フレンスブルクの高等学校教諭
Linstedt, Karl	1856-1892	1870	イエーナ大学神学部	リープシュテットの牧師
Pohle, Rudolf	1856-1914	1871	イエーナ大学法学部	エルフルトの枢密高等行政官
Rathgen, Karl	1856-1921	1867, 1869, 1872	シュトラースブルク大学法学・国家学部	ハンブルク大学教授（経済学）
Seidel, Max	1856-1880	1866	イエーナ大学法学部	大学在学中に死亡
Villers, Alexander v.	1857-1907	1874	イエーナ大学医学部	ドレスデンの医師
Weineck, Rudolf	1858-1880	1870	ハッレ大学哲学部	大学在学中に死亡
Werner, Max	1857-1899	1867	イエーナ大学医学部	アイゼナハの検事

注：姓のアルファベット順に配した。*Neue Deutsche Biographie* (Bd. 20, S. 587) においては、ポーレの生年が1857年とされているが、学籍登録簿の記載に従った。

出典：Vereinigung früherer Schüler des Wilhelm Ernst-Gymnasiums in Weimar. Höhere Schulen in Weimar. Wilhelm-Ernst Gymnasium 58. Matrikel (Verzeichniß, Album) der seit dem Jubiläum 1816 in das Wilhelm-Ernstinische Großherzogliche Gymnasium zu Weimar Eingeführten. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar. *Jahresbericht über das Wilhelm-Ernstische Gymnasium zu Weimar von Ostern 1875 bis Ostern 1876*. Weimar: Druck der Hof-Buchdruckerei, 1876, S. 14. *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 10, S. 464-465, Bd. 20, S. 587.

約一年在学したのち WEG に戻っている。

当時の学院生ハインリヒ・バウムガルテルは、カールが WEG に復学したのちも名残惜しそうに書簡を交わしている⁽³¹⁾。このことから、カールは学院で友達に恵まれていたことを看取できる。バウムガルテルは、WEG に戻った「熊くん (Mutz)」が、「一日中ずっと部屋のなかにおいて、天気の良い日も本を読んでいるんじゃないかい」と冷やかしている⁽³²⁾。この記述は、学業中心のギムナージウムの環境と、外に出ることの多いシャフナー学院の環境との差異をよく表している。

シャフナー学院と WEG との大きな差異は修了生の進路である。両校修了生の進路統計を見出しえなかったが、シャフナー学院創立二十五周年記念式典列席者名簿をみると、OB には多くの商人がいる⁽³³⁾。もちろん、これは式典列席者であるから、地元に残っていて式典に出席できる OB 名士を集めてみたら商人層が多くなったという事情があるのだろうが、学院修了生のなかには実業界で活躍している者が多く含まれているとひとまずみてよさそうである。これにたいして WEG はどうかというと、1876 年に WEG を修了した 12 名（ラートゲンを含む）のうち 10 名までが大学に進学しており、進学先の神法医哲四学部それぞれにおうじて、牧師・法曹・行政官・医師・教師・大学教授になっている（表 V-2）。このことから、シャフナー学院は、体育・修学旅行・体験学習などを通じて、実業界の荒波を渡っていくにふさわしい実践的な教育をすすめ、WEG は、大学進学に特化した教育をすすめていたと考えられる。

カールは、1867 年末以降、遅くとも 1868 年 4 月頃までにはシャフナー学院に（転）入学し、その後この学院の校風になじんだと推察されるが、1869 年復活祭の学年修了をもって学院を去っている。理由として考えられるのは父の意向である。父ペルンハルトは、カールに法曹への道をすすませたいという意向を有しているから、当然シャフナー学院では物足りず、次男を

できるだけ早く WEG に復帰させようとしたのであろう。

心身の再不安定化と再退学

こうしてカールは、WEG の 1869 年の学籍登録簿に第IV学年生として登録されることになり、彼の名は WEG 『学事年報』1869-70 年版にも記載されている。このときの学籍登録簿における登録順は 20 番で、比較的早いから、グンペルダで健康を回復した彼は、この年次に第VI学年に登録した新入生たちとともに、1869 年復活祭に復学・登録したと思われる。このことは、シャフナー学院にひきつづき在学しているバウムガルテル少年から同年 5 月 1 日付でヴァイマルへの書簡が届いていることと符合している。

同月末の書簡のなかで、姉ルーツィエは、「カールちゃんも元気です」と報告している。この書簡中で、彼女は、「彼〔カール〕がひどい病気にかかっていたあいだ」どれだけ心配したか、また「現在ずいぶんよくなっている」ことをどれだけ喜んでいるかを強調している。またそのさい彼女は、自分もかつてオルスハウゼン家の世話になったことに言及している⁽³⁴⁾。ここにおいて、ラートゲン家の健康問題をローベルト・オルスハウゼンが引きうけていたこと、そしてこの間のカールの療養にかんしてもまたこの産婦人科医が直接関与していたことが明示されている。

この年次の『学事年報』において、彼は同学年生の末尾近く(39 名中 34 番)に記載されているが、これは成績が不良だからではなく、他校の成績は比較の対象にならないからである。つまり、WEG に前年次から在籍している生徒たちが前年次成績にもとづいて席次配列されたあと、彼はそのうしろに、他の転入生たちとともに記載されているのである。そして学期末(および年次末)まで在籍しているので、このときはじめて WEG の通信簿が作成されている。1869 年秋の通信簿には、「おそらく病弱であったため、ギリシャ語の筆記成績が口述ほど良好でない」ことが指摘されており⁽³⁵⁾、前所属先であるシャフナー学院における学習が病疾によって妨げられていたことが示唆されている。つづく 1870 年春の通信簿では、欠席時間数が 124 時間に上ることがしめされており、成績にむらがあることが指摘されている⁽³⁶⁾。これはふたたび病疾が重くなったことを反映した事態である。

友達に恵まれ、また健康を回復したことから、シャフナー学院は彼にとって好ましい環境だったと判断できるが、設立されたばかりで実績のない学校は、両親(とくに父)にとって不安であり、大学入学資格取得を考慮すると、伝統と実績のある WEG になるべく早く復学させようとしたのであろう。しかしこの復学はおそらく早すぎたのであり、またせっかくグンペルダの環境に慣れ、友達もできたのに、そこから引きはがされてしまったので、カールは新たなストレスを抱えこむことになってしまった。そのため一年余を経て彼はふたたび中退を余儀なくされている。WEG の『学事年報』1870-71 年版および 1871-72 年版において、彼の名はまた記載されなくなっており、1870 年 4 月以降かつ 1871 年 3 月の学年修了に先立つ時期に

再度退学したことが明らかである。1870年秋の通信簿によると、聖ヨハネの日（6月24日）までは成績評価が可能だが、夏季休暇以降は、健康上の理由からほとんど欠席していたとされており、この学期の欠席時間数は二百時間を超えている⁽³⁷⁾。そして1871年春から1872年春までの通信簿は存在しない。このことから、彼は1870年秋頃にWEGを再度中退したと推定できる。実際、母コルネリアは、同年9月15日付カール宛書簡（発信地ヴァイマル）のなかで、ギリシャ語をしっかりと勉強するように念押ししており、カールはこのときすでにヴァイマルを離れていたことが明らかである（Privatarchiv B. C. Witte）。

ホフヌングスタールにおける保養と学習

カールの二度目の転出先はシュレースヴィヒ＝ホルシュタインである。プロイセンは、対デンマーク戦争に勝利したあとオーストリアとこの地を分割統治し、さらに普墺戦争に勝利して、すでにシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン全体を併合していたから、ラートゲン家の者がこの地に足を踏み入れるのに何の障害もなくなっていた。またカールの父は、かつて蜂起に参画した英雄のひとりとして、この地でつねに賞賛の的になっていた。

このときカールは、ホフヌングスタールのベーク家⁽³⁸⁾に長期間逗留している（Olshausen ca. 1943: 107）。ホフヌングスタールはラートゲン家の出自エッケルンフェルデの近郊に位置しており⁽³⁹⁾、ベークはなんらかの縁者だと推察される⁽⁴⁰⁾。この当時エッケルンフェルデにはギムナジウムがなく、一番近いのは、かつて父ベルンハルトが通っていたシュレースヴィヒの名門ドームシューレだが、ホフヌングスタールから通うことのできる距離ではない⁽⁴¹⁾。したがってこのときカールは学校に通っていないと判断できる。実際、母コルネリアは、1871年11月中旬の書簡において、「学校に通う必要はありません」と明言しており、あわせて「しかし〔学校に通わなくとも〕しっかりと勉強すべきことはまったく当然です」とも言っている⁽⁴²⁾。コルネリアはカールに家庭教師をつけたのである。

カールは、この地で保養に努めながら、家庭教師に就いて学習を積んでいる。その家庭教師を務めていたのは、ベーク家当主の姪に当たるアマンダという女性だと推定される。アマンダは、1872年3月22日付でカールに長文書簡を送っており、そのなかで彼女は、「この冬は勉強に疲れませんか」と尋ねている（Privatarchiv B. C. Witte）。このことから、すくなくとも1871年末から翌年にかけて、彼女がカールの学習の面倒をみていたと思われる。

1871年頃、ジョージ・ミュラー＝ベーク（1854-1928）がカールに送った書簡が2通遺されている⁽⁴³⁾。商人の息子であるミュラー＝ベークはベーク家当主の孫に当たり、ハンブルクに住んでいた。当時17歳の彼は、ホフヌングスタールの祖父宅を訪れた折に、そこに寄宿している2歳年下のカールと親しくなったのであろう。彼はアジア文化に関心をもち、後年地理学を学び、1879年に最初の渡日を果たし（在横浜ドイツ領事館勤務）、中国語と日本語を学んだのち長崎領事として勤務することになる⁽⁴⁴⁾。カールの渡日（1882年）にさいして彼がなん

らかの関与をしたかどうかは判明していないが、その可能性はある（後述）。

この頃、母コルネリアから大量の書簡が届いている。これにたいして父ベルンハルトからの書簡はごくわずかで、彼は妻の書簡の末尾に添え書きをする程度である。これは仕事が多忙だったこともあるのだろうが、もともとカールの病疾は父からのプレッシャーに誘発されており、ラートゲン家の主治医であったローベルト・オルスハウゼンもそのように判断したであろうから、オルスハウゼンは、父ベルンハルトにたいして、あまり次男に口やかましく言わないよう釘を刺していたとも考えられる。

1871年夏、コルネリアがホフヌングスタールにやってきている。父ベルンハルトの7月20日付カール宛書簡によると、彼女は、ハッレに立ちより、おそらくこのときオルスハウゼンの診察を受けたのち、ホフヌングスタールへ向かっている（Privatarchiv B.C. Witte）。そして二か月間この地でカールと時を過ごしている。この頃彼女自身も足を患っており、その状態は車椅子を必要とするほどだったから、痛む足を引きずりながら、末っ子の世話をするために、ヴァイマルから何日もかけて遠路出向いてきたのである（Olshausen ca. 1943: 107）。実際、彼女はこの旅行にひどく難渋しており、とくに鉄道路線が途絶えた先の行程は苦痛であったと推察される⁽⁴⁵⁾。

この年の末に、父母は、カールをヴァイマルに戻す段取りを考えている。12月17日付カール宛書簡において、父は、カールがふたたび心身の力を取りもどし、知力も増して両親に相見えることを強く希望している。そしてそれが実行に移されたのは1872年3月頃だと思われる。というのは、アマンダがカールに前出の3月22日付書簡を送って思い出話などをしており、このことから、このときカールはすでにホフヌングスタールを離れてヴァイマルに戻っていることが明らかだからである（Privatarchiv B.C. Witte）。

幼少期・ギムナージウム時代のラートゲンを苦しめたのは、体質の弱さと環境への不応であった。シュレースヴィヒ＝ホルシュタインのような北方の地にわざわざ転地して保養していること、また後年滞日中に、夏場は好んで軽井沢等において過ごしていることを勘案すると、彼の体質はとくに暑さに弱かったのではないかと推察される⁽⁴⁶⁾。学生時代から滞日時にかけて書かれた彼の書簡中には、滞在先の気温にかんする記述が多く、なかには、自室のどの位置が適度に涼しいのかを調べている記述もある⁽⁴⁷⁾。その一方で、寒さにはかなり耐えられたようだ。というのは、アマンダの書簡中に、カールがつくった雪だるまが、彼が去ったあとの3月下旬でもまだ溶けずに残っていることが記されており、厳寒のホフヌングスタールで保養・学習生活を送りながら、なおかつ雪だるまをつくるだけの気力・体力が彼にあったことを確認できるからである。

彼の体質・病疾の詳細については次回考察する。

（未完）

〔注〕

- (1) Brief: Cb 55, 55: 31, 03. Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek.
- (2) 長女イーナ（14歳）、次女トーニ（12歳）、長男ベルンハルト（9歳）、三女ルーツィエ（6歳）の4人である。
- (3) ドーレ・ヘンスラーの1856年12月30日付および1857年2月17日付コルネリア・ラートゲン宛書簡による（Best. 340, Nachlaß B. Rathgen, Karton Nr. 9-2. Hessisches Staatsarchiv Marburg）。
- (4) コルネリアが1841年にベルンハルトと結婚した直後から、ドーレが1860年に亡くなる直前まで、コルネリアとドーレとのあいだでほとんど間断なく膨大な数の書簡が交わされており、そのうちドーレからの来簡は、コルネリアとベルンハルトの長男ベルンハルト・ラートゲンの遺稿集のなかに含まれている（前注と同じ箱に収蔵されている）。
- (5) 本来の綴りは Carl だが、のちにラートゲン自身が Karl と綴っている。
- (6) Hofgemeinde, Taufbuch, Jahr 1856, S. 221. Ev. Pfarramt Weimar „Taufbuch 1848-1858“ H 8/11 [Mikrofiche]. Evangelisch-Lutherische Kirchengemeinde Weimar.
- (7) キール―アルトナ間の鉄道路線はすでに1844年に開通していた（Staisch 1994: 147）。1840年代の鉄道建設ラッシュの結果、この1857年当時にはキールからヴァイマルまで切れ目なく鉄路で結ばれてはいるが、主要都市間を結ぶ路線が入りみだれているため、その経路は直線とは程遠く、幾重にも迂回を重ねざるをえなかった（Gerlach 1986: XXI）。
- (8) ヘレーネ・ペーレンスが亡くなった地はベルリンであるらしい（SHBL 3: 34）。彼女はヴァイマルからキールには戻らず、ベルリンに住む娘ティーネの許に身を寄せたのかもしれない。
- (9) Vereinigung früherer Schüler des Wilhelm Ernst-Gymnasiums in Weimar. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar. *Jahresbericht über das Fürstlich Schwarzburgische Gymnasium zu Arnstadt in dem Schuljahre 1864-65*, S. 10.
- (10) しかし、のちに長男ベルンハルトは、子供の積極性や自発性を重視する母の態度について語っているから（Rathgen, B. 1916: 15）、コルネリアは、この入隊問題にたいしても最終的には長男の意向を尊重しようとしたと思われる。
- (11) このメモは日付を書いているが、1865年3月頃のものと思われる（Best. 340, Nachlaß B. Rathgen, Karton Nr. 8. Hessisches Staatsarchiv Marburg）。
- (12) 「軛に繋がれない不屈の民（kernfestes Volk, das kein Joch trägt）」とはシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン人を指している。
- (13) これは、コルネリアのおかげでトーニと結婚することができたフリードリヒ・プレラーからみた人物評であり、恩義を感じているプレラーはコルネリアを最大限に称賛しているから、その点を多少差しひいて考えるべきかもしれない。
- (14) Rathgen, K., „Schweizer Reise von mir 1866“. Privatarchiv B.C. Witte.
- (15) Bex は、ヴォー州（Vaud, Waadt）の小都市で、塩の産地として知られている。
- (16) Vevey は、ヴォー州の都市で、レマン湖に面している。
- (17) Saint-Maurice は、ヴォー州に隣接するヴァレー州（Valais, Wallis）の村である。
- (18) これでは日の計算が合わないので、28日か29日ではないかと思われる。
- (19) Morges は、ヴォー州の都市で、レマン湖に面している。
- (20) バルトルト・C・ヴィッテへの聴き取りによる。
- (21) Wilhelm-Ernstisches Gymnasium zu Weimar は、文献・時期によってすこしずつ校名表記に異同がある。現在は Goethegymnasium と改称しているこの学校のホームページによると、ラートゲンが在学していた当時は Herderplatz あたりに校舎があり、1887年に Amalienstraße

に移転して現在にいたっている (<http://www.goethegym.net/geschichte.html>)。

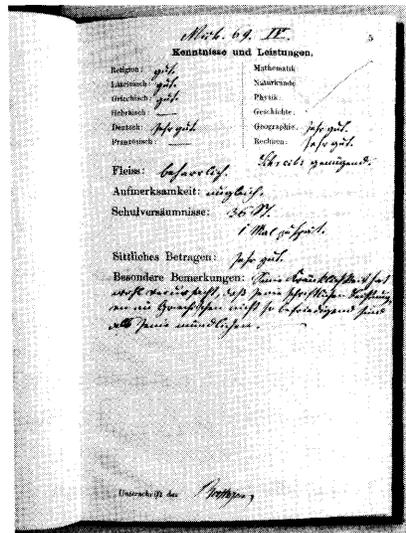
- (22) このファイルは、あらかじめ項目名が印刷されたカードにタイプ打ちで記入されている。ラートゲンの没年(1921年)と兄ベルンハルト・ラートゲンの没年(1927年)も記載されており、したがって古い生徒情報を後年になってから整理したものである (Vereinigung früherer Schüler des Wilhelm Ernst-Gymnasiums in Weimar. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar)。
- (23) 通信簿は、最初から綴じられた冊子体で、印刷された通信欄に半年(学期)毎に書きかわえられていく。秋(夏学期分)の通信簿はミカエル祭日(9月29日)、春(冬学期分)の通信簿は復活祭の頃に記録される。学習到達状況通信欄 (Kenntnis und Leistungen) 一頁は縦205ミリ、横130ミリで、一頁内にその学期のすべての内容が記される。通信簿は次学期への申し送りという性格をもつものであり、そのために在籍最終学期(ラートゲンの場合1875/76年冬学期)の通信簿は作成されない。したがって、9学年(18学期)通算で、通信欄が17頁あれば、一冊のうちにギムナージウム在籍全学年(最終学期を除く全学期)の通信簿記載が可能であり、冊子には余裕をみて20頁分の通信欄が設けられている。しかし1873年夏学期からは新しい冊子が使われているので、ラートゲンの通信簿は二冊ある。第二冊の凡例に記されている評価基準が第一冊とは異なっていることからみて、1873年夏学期から評価基準が改定され、それにともなって全生徒に新しい通信簿が配布されたと推察される。各学期通信簿の末尾には父のサインがある。通信簿は、その内容について父兄に確認させううえで、在学中は学校側に保管され、全課程を修了したさいに当人に手渡されたものと思われる (Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu [Weimar]. K. Rathgen, erstes Buch, zweites Buch. Privatarhiv B.C. Witte)。

- (24) 通信簿には最初からノンプルが印刷されており、ラートゲンに渡された通信簿第一冊の凡例(第3頁)の次(何も記されていない空白頁である第4頁の次)の第5頁に記されているのは1869年秋の通信簿だから(図V-1)、1867年秋~1869年春の通信簿は、書かれたがその後失われたのではなく、最初から書かれなかったことを疑う余地はない。

- (25) Kalbsriethはテューリンゲン北部の小村で、もとはヴォルツォーゲン家の所領であった。ヴァイマルからは直線距離で四十キロほど北方に位置している。

- (26) WEGの1869年学籍登録簿に、カールの前所属校はScheffnersches Institutだと注記されている (Höhere Schulen in Weimar. Wilhelm-Ernst Gymnasium 58. Matrikel (Verzeichniß, Album) der seit dem Jubiläum 1816 in das Wilhelm-Ernstinische Großherzogliche Gymnasium zu Weimar Eingeführten. Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar)。この記録者はSchaffnerをScheffnerと誤記している。

- (27) 学院設立時にシャフナー自身が主張し、また実行に移しているのは、通常の教科のみならず、音楽、図画、習字、体操、水泳を重視し、また野外



図V-1 ラートゲンの通信簿

冊子体になっている通信簿の記入可能な第一頁である第5頁には、Mich. 69. IV.と記されており、ラートゲンの最初の通信簿が、1869年のミカエル祭日(9月29日)頃に作成された第IV学年(Quarta)のものであることがわかる。

における体験を積極的に組みこんだ独特なカリキュラムである（Akten des Herzog. Sächs. Konsistoriums zu Altenburg betreffen das Gesuch des Oberlehrers Dr. phil. Schaffner in Keilhau bei Rudolstadt um Erlaubniß zur Errichtung einer Lehr- und Erziehungsanstalt in Gumperda. 1867-. Vol. I. Angefangen im Jahre 1867. Archivzeichen III. R.R. Nr. 15. Ministerium Abt. für Kultusangelegenheiten 11317, Nr. 17 b. Staatsarchiv Altenburg）。そのため広大な敷地が必要であり、シャフナーは、イエーナ近郊の寒村 Gumperda にある旧領主邸の広大な屋敷地を取得して学校を開設したのである。教員・生徒たちは、学院長とともに、とくに農作業や植林に汗を流した。シャフナーはまた修学旅行も重視している。

- (28) 後年になると、この学院自体が大学入学資格を付与できるようになる。記録上確認できるかぎり、学院がはじめて大学入学資格を認定したのは 1875 年 2 月である（Anlage A. Protokoll über die im Februar 1875 an der Erziehungsanstalt zu Gumperda abgehaltene Abiturientenprüfung. Acten über das Institut des Dr. Schaffner in Gumperda von 1867 an, nebst Protokollen über die Abiturientenprüfungen 1867-1875. Konsistorialarchiv III RR Nr. 15 a. Ministerium Abt. für Kultusangelegenheiten 11318. Staatsarchiv Altenburg）。
- (29) シャフナーの妻エリーゼは、教育家フリードリヒ・フレーベルの姪である。
- (30) 注 27 と同じファイルの Nr. 13-14。Staatsarchiv Altenburg.
- (31) バウムガルテルは、ヴァイマルのラートゲン宛に 1869 年 5 月 1 日付・5 月 19 日付・8 月 20 日付で書簡を送っている（Privatarchiv B.C. Witte）。
- (32) バウムガルテルのラートゲン宛 1869 年 5 月 1 日付書簡による（Privatarchiv B.C. Witte）。
- (33) *XVIII. Programm der Lehr- und Erziehungs-Anstalt zu Gumperda in Thüringen*, 1893, S. 12-14.
- (34) ルーツィエ・シュモラーの 1869 年 5 月 31 日付ティーネ・トヴェステン宛書簡による（Brief: Cb 55, 55, 03. Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek）。発信地はハッレである。この書簡は、ティーネから結婚祝いに絵をもらったお礼のために書かれており、カールにかんするこの近況報告は、直接には、4 月 6 日にヴァイマルで執りおこなわれたルーツィエとグスタフ・シュモラーの結婚式に列席したカールが元気であったことを述べたものであろう。
- (35) *Censurbücher für Schüler des Grossherzoglichen Gymnasium zu [Weimar]. K. Rathgen, erstes Buch, S. 5.* Privatarchiv B.C. Witte.
- (36) Ebd., S. 6.
- (37) Ebd., S. 7.
- (38) 父ベルンハルト・ラートゲンの伝記をまとめたフィリップ・ユストゥス・オルスハウゼンは Beek と綴っているが、1871 年頃と推定されるコルネリアの書簡および父ベルンハルトの書簡添え書き（いずれも日付なし）によると Beek である。また後述する F. George Müller-Beek からの来簡もある（Privatarchiv B.C. Witte）。
- (39) Hoffnungsthal は、エッケルンフェルデに隣接する Goosefeld 村の一部である。この当時ラートゲンに宛てられた書簡のなかにひとつだけ封筒が遺されているが、宛名は „Herrn Karl Rathgen. Hoffnungsthal in Eckernförde“ とされている（Privatarchiv B.C. Witte）。
- (40) ラートゲン直系の孫 2 名に照会したところ、Beek 家についてまったく心当たりがないとのことであった。ラートゲン同族会は詳細な系図を作成しており、そこでも察知されないとすると、親戚筋ではないと思われる。そこでわれわれの注意を惹くのは、カールが WEG に入学した直後の 1867 年 7 月初旬に、カールが父ベルンハルトに連れられてエッケルンフェルデを訪れたという事

実である。このとき父は、当地の実状を調査しており、ホフヌングスタールの視察官 Beck の上申書を読んだ彼は、プロイセンの諸制度を性急に導入した結果、人々が重税に苦しんでいる様子に強い憤りを表明している (Olshausen ca. 1943: 100-101)。この Beck が Beeck であった可能性はある。つまり父ベルンハルトは、1867年7月に税制問題を通じてベークと知りあい、協力関係を結び、またカールもベークと面識をもったと考えられる。そして1870年にカールが WEG を中退せざるをえなくなったとき、ベークがカールの保養・学習生活を引きうけたのであろう。

- (41) エッケルンフェルデとシュレースヴィヒとは直線距離で二十キロほど離れており、この当時はまだ鉄道で結ばれていなかった。
- (42) この書簡は日付を欠いているが、文中で、カールが「五週間後に15歳になる」ことが記されている (Privatarchiv B.C. Witte)。
- (43) 一通は1871年(月不明)20日付で、もう一通は日付を欠いているが、同時期だと思われる (Privatarchiv B.C. Witte)。Fernando George Müller-Beeck の父 Fernando August Müller (?-1867) は商人として世界各地で活動しており、イギリスにも店舗をもっていた。したがって彼が息子につけた名 George は、たぶん「ゲオルゲ」ではなく「ジョージ」である。英語名のほうが、将来息子が国際貿易に従事するさいに通りがいいからである。
- (44) Curriculum vitae. Personalakten 10.295. Acten betreffend: den Fernando George Müller-Beeck. Vol.I v. Novb. 1884 bis Februar 1891. Rep. IV. Personalia. Nr. 90. Politisches Archiv des Auswärtigen Amts.
- (45) エッケルンフェルデに鉄道路線が到達するのは1881年のことである (Staisch 1994: 152)。したがって、母コルネリアがホフヌングスタールを訪れたとき、キール、レンツブルク、シュレースヴィヒのいずれかから先は道路を行くか、あるいはキールから船を利用しなくてはならなかった。直線距離でこの三カ所からいずれも二十キロほど離れている。
- (46) しかし滞りになると、ある程度暑さにも耐えられるようになったらしく、1883年には夏の京都を訪れている。
- (47) ライプツィヒ大学在学中の彼は、急に暑くなった日に、部屋のなかの日の当たらない一角の気温を測っている (1879年6月28日付父宛書簡, Privatarchiv B.C. Witte)。

〔文献〕

- Bergner, H. 1917: *Gumperda 1867-1917; Festschrift zur 50jährigen Jubelfeier der Anstalt*. Hamburg: Rademacher
- Francke 1916: *Geschichte des Wilhelm-Ernst-Gymnasiums in Weimar*. Weimar: H. Böhlau Nachfolger
- Gerlach, H-H. 1986: *Atlas zur Eisenbahn-Geschichte; Deutschland, Österreich, Schweiz*. Zürich: O. Füssli
- Jordan, M. (Hrsg.) 1904: *Friedrich Preller der Jüngere; Tagebücher des Künstlers*. München-Kaufbeuren: Druck und Verlag der Vereinigten Kunstanstalten
- Kahl, M. 2007: Vom Rittergut zur Erziehungsanstalt; Zur Bau- und Nutzungsgeschichte von „Schloß“ Gumperda. Thüringisches Landesamt für Denkmalpflege und Archäologie (Hrsg.), *Aus der Arbeit des Thüringischen Landesamtes für Denkmalpflege und Archäologie*, Jahrgangsband 2006. Altenburg: E. Reinhold
- Kleemann, G. 1938: Der erste Schultag in Gumperda, 1. Oktober 1867. (Aus den Aufzeichnungen Dr. Siegfried Schaffners d. Ä.) *Mitteilungen des Verbandes ehemaliger*

- Gumperdaer*, 21 Jg., Nr. 1
- Olshausen, J. v. ca. 1943: Johann Bernhard Hederich Rathgen, ein niederdeutscher Charakterkopf. Manuskript
- Rathgen, B. 1916: *Lebensskizze und Charakterschilderung unserer Mutter*. Köln: DuMont Schauberg
- Rathgen, B. 1928/87: *Das Geschütz im Mittelalter*, neu herausgegeben und eingeleitet von V. Schmidtchen. Düsseldorf: VDI-Verlag
- Schaffner, S. 1876: Kurzer Bericht über die Gründung, Entwicklung und den gegenwärtigen Stand der Anstalt. *I. Programm der Lehr- und Erziehungs-Anstalt in Gumperda in Thüringen*. Leipzig: C. G. Naumann
- SHBL: *Schleswig-Holsteinisches Biographisches Lexikon*, Bd. 1-5 (1970-79). *Biographisches Lexikon für Schleswig-Holstein und Lübeck*, Bd. 6-11 (1982-2000). Neumünster: Wachholtz
- Staisch, E. (Hrsg.) 1994: *Der Zug nach Norden; 150 Jahre Eisenbahn-Verkehr in Schleswig-Holstein, von der Christian-Bahn bis zur Elektrifizierung*. Hamburg: E. Kabel
- 野崎敏郎 2004 「カール・ラートゲンの渡日と東京大学 —— 姻戚関係と招聘過程の分析 ——」 佛教大学総合研究所編刊『近代国家と民衆統合の研究 —— 祭祀・儀礼・文化 ——』
- 野崎敏郎 2005 『カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究』 科研報告書

〔付記〕

本稿は、平成21年度佛教学大学特別研究費による個人研究の成果の一部である。貴重な史料を貸与されたラートゲンの令孫バルトルト・C・ヴィッテ博士のご厚情に深謝する。また手稿類の探索およびその判読のためにご助力を賜った各公文書館・図書館のスタッフの方々に深謝する。

（のざき としろう 公共政策学科）

2010年4月8日受理